

令和2年度 大坪小学校校内研究計画

1 研究主題

自らの考えを確かに表現できる児童の育成

～ 国語科・算数科における指導方法のあり方 ～

2 主題設定の理由

(1) 資質・能力ベース（3つの柱）

本年度から実施される新学習指導要領では、これからの社会を切り拓き生き抜くための必要な力である資質・能力について、教育課程全体を通して育成することを基本的な考え方としている。また、育成すべき資質・能力を明確化し、以下のように、3本の柱に整理し具現化している。

【資質・能力を育成する3つの柱】

- ①「知識・技能」 知識及び技能が習得されるようにすること
- ②「思考力・判断力・表現力」 思考力、判断力、表現力等を育成すること
- ③「学びに向かう力・人間性等」 学びに向かう力、人間性等を涵養すること

具体的には、第1に「何を理解しているか、何ができるようになるか」という視点から、生きて働く「知識・技能」の習得が挙げられている。第2に「理解していること・できることをどう思うか」という視点から、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成が挙げられている。第3に「どのように社会・世界とかがわり、よりよい人生を送るか」という視点から、学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養が挙げられている。

新学習指導要領は、教科等の目標や内容が、これらの資質・能力の3つの柱で整理されているところに大きな特徴がある。教科等の指導計画の作成、各単元及び一単位時間の授業づくりの工夫を進めるにあたっては、資質・能力の3つの柱で教育課程全体が貫かれていることを意識し、それらがバランスよく育成されるように配慮することが求められる。

(2) 資質・能力を育成する「主体的・対話的で深い学び」

資質・能力の育成のために学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことの重要性から、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。「主体的・対話的で深い学び」とは、新学習指導要領で求められる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力を育成するための大切な学びである。

この学びでは、実社会や実生活とかがわりがあるリアリティのある学びに主体的に取り組んだり、多様な他者との対話を通じて考えを広めたり深めたりする学びを実現することが大切になる。また、単に知識を獲得するだけにとどまらず、身につけた資質・能力が様々な問題の対応に活かせることを実感できるよう、学びの深まりの実現をめざすことも重要となる。

こうした「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、ねらいをもって学習課程を工夫する授業づくりが必要であり、そのために「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点に立った授業改善が求められている。各教科においては、言語活動、観察実験、問題解決学習等を効果的に取り入れることを主眼とすることや、各教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を働かせることが重要になることなどが、留意事項として示されている。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」実現のポイント

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、教師が一方向的に教え込む暗記・再生型の授業から、児童自ら考え他者に伝え合う思考・発信型の授業に転換していかなければならない。しかし、これまでとは違う新しい教育活動を推進しなければならないという訳ではない。本校においても、これまでの研究成果をこれからの研究に活かすとともに、地に足をつけ土台を強固にした研究推進を実行していくことが重要であると考えている。

以下に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたポイントを、これまでの研究で確認してきた視点を包含して、3つの学びごとに整理して示す。

【3つの学び】

① 「主体的な学び」

児童自らが学びをコントロールできるようになることをねらう。問題場面を自分事として捉え、自分の力で解決し、その過程と成果を自覚させる。これを繰り返すことで、児童は、自分自身の力で学びをコントロールできるようになる。そのためには、1単位時間の授業づくりについては、導入における「つかむ過程」と「見通す過程」、終末における「振り返る過程」に意識を向けることが大切である。

② 「対話的な学び」

他者との学び合いを重視することが大切にする学びである。問題解決場面においては、自分一人ではなく、多くの人で協働し解決に向かって取り組んでいくことが必要である。そのためには、1単位時間の授業づくりについては、「考え合う過程」で、他者と力を合わせて問題解決を行ったり新たな考えを広げ深めたりすることが大切である。

③ 「深い学び」

身につけた知識や技能を活用して関連づけることが大切になる学びである。明確な問題意識をもった主体的で文脈的な学びにより知識や技能のつながりを確認することが必要であり、知識や技能を対話によりつなぐことで再構成するという処理場面の活性化なども重要となる。また、学習活動を振り返り、収集した情報や既有知識を関連させ、自分の考えとして整理し意味づけたり、それを共有したりすることも大切になる。

このように、「主体的な学び」と「対話的な学び」は、「深い学び」に大きく関与している。本校の研究においても、今後も、それぞれの学びを意識していくと同時に、「深い学び」の実現に向かうよう、ねらいを明確にもち授業づくりを行う研究を行っていく。また、前述したように、これまでの研究を活かしながら、今年度も、指導方法をあり方についての実践研究を行っていくことを確認したい。

（4）研究の経過と児童の実態から

本校では、平成26年度より国立教育政策所並びに佐賀県教育委員会の指定を受け、「教育課程算数科」の研究を行ってきた。平成25年度の全国学力・学習状況調査において、算数A算数Bともに全国比を大きく下回っており、特に算数Bにおける数学的な考え方は著しく低い状況であった。解答を見ると、まず無答率が高いことが目立っていた。そこで、研究初年度は、算数科を中心として思考力・表現力を伸ばすための授業づくり、特設の時間（大坪チャレンジ）を設定しての基礎的・基本的学力の向上、家庭学習（家勉）の習慣化に取り組んだ。その結果、求め方や理由などの自分の考えをなんとか表現しようとする児童が増えるなど、問題に取り組む姿勢に変化が見られるようになった。

算数科研究2年目となる平成27年度は、前年度の取組を土台にして深化させた。まず、算数科の授業実践においては、単元全体を見通し、各時間のつけたい力をはっきりさせるための単元計画を立て、＜知識・技能を理解させる場＞と＜思考力・表現力を伸ばす場＞を教師がしっかり意識して教材研究できるようにした。単位時間の学習過程では、主に「練り合い」の場での児童たちの学び合いを中心にして発問や解答の提示方法等を工夫し、問題にかかわる態度や思考力・表現力の伸長をねらった。また、大坪チャレンジにおいては、内容や方法などが吟味され、より効果的な実践となった。更に、家庭との連携を図りながら家勉を中心とした家庭での学習習慣の定着をめざしていった。これらの取組の結果、平成27年度12月の全国学力・学習状況調査では、特に算数Bにおいて大きな伸びが見られた。また、友だちの考えとのかかわりの中で学びを高めていく児童たちの姿が見られ、思考力・表現力、更には、それに伴って知識・技能も定着してきた。

算数科研究の3、4年目となる平成28年度及び平成29年度は、児童たちの伸びを評価できる場を年間計画の中に設け、「この活用問題を解くためには何を習得させなければならないか」と逆に考えることでめざす姿を教師が明確にもったり、教師も児童もその結果を次の学習で活かせるようにしたりすることで、更なる学力の伸長を期待したいと考えた。思考力・表現力を伸ばすために、全学年において年間約5回の記述式テスト（思考力テスト）を実施し、指導に活かしていった。4年間の取組により、学習状況調査の結果は大きく上昇した。平成29年度4月の全国学力・学習状況調査では、算数ABともに全国平均を上回り、12月の県学習状況調査でも、5学年は県平均並み、4、6学年は、県平均を大きく上回ることができた。4年前と比べて、無回答率が低下したことから思考力・表現力の伸びを実感することができる。

算数科研究の5, 6年目となる平成30年度及び平成31年度(令和元年度)は, 活用力向上研究指定事業の佐賀県指定を受け, 活用力向上についての研究を行った。単元計画の中に「理解の場」, 「思考の場」, 「習熟の場」を設定するとともに「思考の場」に活用場面を設定し, 知識及び技能や思考力・判断力・表現力を育成するために, 単元というまとまりを見通して授業改善を行った。表現力を育成することを念頭に置いた授業改善にも取り組み, 習得した知識や技能を活用する場面を意図的に設けたり, 切実感をもって自分の考えを様々な表現物を用いて表出させる場を設けたりしたことで, 授業の中では, 数学的表現を用いて説明を行う児童の姿を見ることができた。また, 平成31年度4月調査では, 6学年が県平均を上回るとともに, 令和元年度12月の県学習状況調査では, 4・5・6学年の全ての学年において, 算数科の本校の平均正答率と活用問題の平均正答率が, 佐賀県の平均正答率を上回るという結果になった。更に, 本校独自調査の児童アンケートの結果からは, 「算数科の授業において, 自分の考えを図・式・言葉を使ってノートに書いている。」と考える児童の割合が86%となり, 初めて, 年度当初に設定した成果指標を上回った。このことから, 少しずつではあるが確実に書くことへの抵抗感がなくなり書く意欲が高まっていることが分かった。しかし, 12月調査において, 4・5・6学年の国語科, 社会科, 理科の本校の平均正答率が, 県の平均正答率を下回った。課題のある趣旨は, 「図・表・グラフ等の資料を基に根拠を明らかにして書くこと」や「条件に合わせて書くこと」などの自分の考えを整理し表現するという書くスキルに関するものであった。

これらのことから, これまでの算数科研究を通して, 児童の伸びや定着が高まる成果を得たことを確認できた一方, 算数科以外でも, 更に表現力の育成をめざした授業改善が必要になってくるとい課題が浮き彫りとなった。教育活動全体の中で児童自らの考えを表出させる場を意図的に設けたり, スキルを身につけさせたりして, 表現力の向上をめざすことが急務であることが確認された。

以上のことから, 今年度は, 主要教科の国語科と算数科を中核に据えて, 自らの考えを確かに表現できる児童の育成をめざして取り組んでいくこととする。そのために, 算数科研究で培ったこれまでの財産である(「1単元というまとまりを見通して授業改善を行った研究」, 「1単位時間の学習過程を意識し, 習得した知識や技能を基に自らの考えを表現させる場を設定して授業改善を行った研究」等)を活かして継続して取り組んでいく。また, 表現力の根幹となる国語科の指導方法についても拡張して研究を進めていくことで, さらに表現力の幅をもたせ, 児童の学力の伸長を図ることにつながると考えている。

表現力の向上については, 育成すべき資質・能力の柱の一つとして, 「思考力・判断力・表現力等」が挙げられており, 思考力, 判断力, 表現力は, 切り離してはどれも育たないかわりのある能力である。これらの力が, 互いに補完しあう関係にあることを念頭に置いて研究を推進していく。

3 研究主題「自らの考えを確かに表現できる」について

(1) 「自分の考えを確かに表現できる」についての本校の捉え

自分の考えをもち, 筋道を立てて表現し, 互いの考えを伝え合うことができる。

(2) 国語科・算数科における「自分の考えを確かに表現できる」についての本校の捉え

【国語科】

- 文章を読んで理解したことなどに基づいて自分の考えを形成したり, 話の内容が明確になるように構成を考えることを通して自分の考えを形成したりするとともに, 互いの立場や考えを尊重し, 言語を通して自らの考えを正確に整理したり, 適切に表現したりすることができる。

【算数科】

- 事実を確認し, 既習事項を基に構想を立てて, 数学的な表現を用いて問題を解決できるとともに, 根拠を明らかにし筋道を立てて, 互いに自分の考えを分かりやすく伝え合い自らの学びを評価できる。

(3) 研究主題にかかわる事項（下線部は、関係する部分）

①「資質・能力」に関する事項

基礎・基本を確実に身に付け、自ら問題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力。
＜文科省ホームページより＞

②「思考力・判断力・表現力」に関する事項

【国語科】

考える力や感じたり想像したりする力を養うこと、日常生活における人とのかかわりの中で伝え合う力を高め自分の思いや考えをもつことなどができるようにする。

＜新学習指導要領解説 国語編より＞

【算数科】

日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見だし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。

＜新学習指導要領解説 算数編より＞

③「表現力」に関する事項

【国語科】

人間と人間の関係の中で、互いの立ち場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めること。

＜新学習指導要領解説 国語編より＞

【算数科】

根拠を明らかにし筋道を立てて体系的に考えることや、言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決したり、自分の考えを分かりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現して伝え合ったりすること。

＜旧学習指導要領解説 算数編より＞

4 研究の目標

国語科・算数科において、解決に向かうプロセスの中で、児童が表現する（問題に対して自分の考えをもち、筋道を立てて表現し、互いの考えを伝え合う）場面を効果的に取り入れた授業づくりを行うことで、児童自らの考えを表現できる指導方法のあり方を明らかにする。

5 研究の仮説

次のような手立てをとれば、児童の表現力の育成につながるであろう。

ア 児童の表現力を伸ばすための国語科・算数科の授業改善

イ 基礎的・基本的な知識・技能を定着させるための時間や表現力を高める問題に取り組むための時間の効果的な運用

ウ 望ましい学習習慣の確立

6 研究の内容と方法

(1) 表現力を伸ばすための授業改善

①授業実践

ア 1単元の全体を見通し、効果的な言語活動を設定したり、「理解の場」「思考の場」「習熟の場」を位置づけたりして、指導計画を作成する。

「理解の場」

主に教え理解させる授業（確実な理解を必要とする内容を教え、学ばせる授業）

・単元の流れを確認する。 ・解決方法について理解する。

「思考の場」

主に考えさせる授業（自力解決や練り合いを深めることによって学ばせる授業）

・考えを形成する。 ・知識や技能を対話により再構成する。活用する。

「習熟の場」

学習内容の定着を図る授業（繰り返しの練習で理解を深め、定着を図る授業）

・互いの考えを共有する。 ・定着を図る。 ・自らの振り返る。

イ 1単位時間の授業における基本的な学習過程（西部型授業）に沿った、授業づくりを確実に行う。

※授業チェックシート等を活用し、授業改善に活かす。

ウ 単元の系統を把握し、必要に応じてレディネス調査を行い、授業改善に活かす。

エ 授業研究会を実施したり授業を見合う機会を設けたりして、開かれた空間を位置づけ、全員が積極的に授業研究に関わっていく体制づくりを行う。

オ アンケート（児童・教師）の実施と分析を行い、授業改善に活かす。

カ 「(例) 事実・方法・理由」などの表現する場面を設定するとともに発問の質の向上をめざす。

②表現力の伸びを見るためのB問題を意識した記述式テストによる評価

ア 年に4回程度（算数科2回、国語科2回）、市販の記述式テストを使用してテストを行う。総括的評価の一つに位置付け、児童にも評価の基準を示す。

イ 教師と児童が共に、できなかった要因は何だったのか探り、次の学習に活かす。

ウ 伸びを見ていく材料として、解答は保管しておき、年間を通して比較し考察する。

(2) 朝の時間（大坪チャレンジ）の効果的な活用

ア 「大坪チャレンジ」（8時15分～8時30分）を設定し、授業の土台となる基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図るための問題と補足的な指導、B問題を意識した記述テストを行うための問題の選定を行うとともに、全職員で指導にあたる。

イ 算数科については、基礎・基本的な計算ドリル学習を行い、火・金曜日に実施する。

国語科については、漢字、音読、言葉の意味調べを中心に、月・木曜日に実施する。

ウ 朝の時間の効果的な運用を図るための年間計画を作成する。それを基に計画的に実施する。

(3) 学習習慣・生活習慣の確立

- ア 家庭との連携を図りながら、家庭学習（家勉：学習する内容を自分で考える）・学習習慣・生活習慣の充実を図る。
- イ 校内や各教室の環境・掲示物を工夫し、国語科・算数科に対する興味・関心を高める手立てとする。

7 めざす児童像

自分の考えをもち、筋道を立てて表現し、互いの考えを伝え合う児童

- 低学年：自分の考えをもち、進んで伝え合う児童
- 中学年：友達と考えを比べ、認め合う児童
- 高学年：友達との考えを比較検討し、高め合う児童

8 研究の組織

